長崎大学工学部の昼間・夜間バリアフリー調査

長崎大学工学部　正　後藤恵之輔　　長崎大学工学部　学○北嶋　清
長崎大学大学院　学　下田　諭志　　長崎大学工学部　学　木村　拓

1．はじめに

近年、多くの大学は学生と教官が利用するだけではなく、多くの市民や他の大学生、企業、障害者や、他にも数多くの人々が利用する公共の場所となってきている。そこには、様々な人が利用するために、数多くのニーズが出てくると思われるが、全ての人に対して障壁を無くすというバリアフリーは、これから必ず必要となってくるであろう。

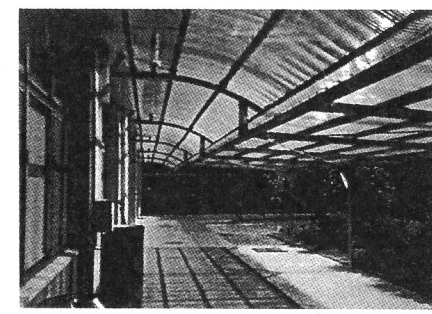
本研究では、長崎大学工学部 1 号館の昼間と夜間のバリアフリー調査を行い、昼間には見えない夜間のバリアを見つけることを主な目的とした。調査日時は、1999 年 9 月 9 日・19 日に工学部 1 号館の昼間バリアフリー調査を、1999 年 11 月 4 日に同所の夜間バリアフリー調査を行った。調査方法は、徒歩と車いすにより通路を回り、障壁箇所を調べていった。

2．工学部 1 号館の昼間・夜間のバリアフリー調査と調査結果

2.1　工学部内通路

写真－1 は工学部 1 号館内の通路であるが、窓が少ないために昼間でも薄暗い。特に夜間には電気が点灯していないと通路においてある実験道具やごみ箱、灰皿が見えなくなり、車いす利用者や視覚障害者にとっては大変危険である。近年、工学部 1 号館内の多くの段差に、スロープが設置されるようになった。スロープの設置により、車いすでの移動の範囲が大きく広がったが、まだ、全ての場所に移動できるほどではなく、スロープも車いす利用者 1 人で利用できないものもある。写真－2 は 1999 年 10 月に新しく改修された工学部 1 号館中庭の雨よけである。雨よけは、全ての人々にとって役に立つものであり多くの場所に設置されているが、車いす利用者にとっては傘がさせないので特に役立つものである。

写真－1　工学部 1 号館内の通路



写真－2　工学部 1 号館中庭の雨よけ

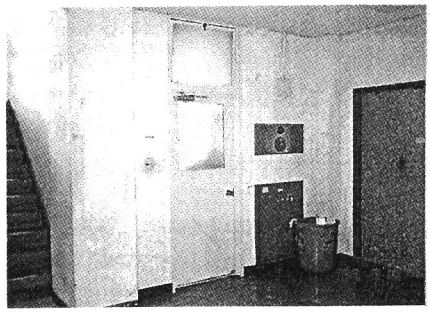
2.2　階段・エレベータ

工学部 1 号館内の階段は、昼間は窓があり明るいが、夜間になると電気が点灯していないと大変暗く、階段の段差が分からない。階段の電気のスイッチは、電気を消してもスイッチが点灯しないために踏面が分からなくなる。最近では少しずつスイッチが改修されて、スイッチ自体が点灯するものに取替えられている。工学部 1 号館内にはエレベータが 1 機設置されている。エレベータにより上下の移動はできるが、1 台しか設置されていないため、移動する距離が遠くなってしまう。写真－3 は工学部 1 号館エレベータ前のスロープである。このスロープの前には荷物運搬用の車がよく止まっており、スロープを利用する際の妨げとなってしまう。

写真－3　工学部 1 号館エレベータ前玄関口

2.3 トイレ

現在、工学部 1 号館内には、各フロアー5 箇所のトイレが設置されていて、そのうち 2 箇所が 1997 年に新しく改修された。現在、障害者や高齢者、けがをしている人、その他様々な人が、洋式トイレのほうが使いやすいという意見があるが、工学部 1 号館での洋式トイレの普及状況は表－1 のように、明らかに遅れている。新しいトイレは照明が明るく、利用しやすくなっているが、古いトイレは、2 つある照明のうち 1 つしか点かなくなっており、大変暗くなっている。これは電気の消費量を減らすための処置だと思われるが、女性には大変利用しにくくなっている。新しく改修された和式トイレには、便器の前に手すりが設置されている。これは、立ち上がる際の手助けとなっており、足腰が弱っている人にとっては大変有効なものであり、すべてのトイレに設置が望まれる。写真－4 は工学部 1 号館 1 階エレベータ横の男性用トイレである。古いトイレの中には、トイレのマークが設置してなく、初めて利用する人にはそこが何か分からず、利用しにくい状況である。これと同じく、現在の工学部の案内地図にはトイレの位置は分かるが、そのトイレが男性用なのか女性用なのかは表示していない。工学部内には男性用のトイレの数が圧倒的に多く、初めて利用する女性が女性用を見つけるのが困難である。これから新しく案内地図を改修していく際には、男性用、女性用、洋式、和式の表示を明確にしていくことが望まれる。



写真－4　工学部 1 号館 1 階エレベータ前のトイレ

表－1　便器の種類と個数

	種類	新	旧	計
男性用(33)	和式	11	18	29
	洋式	2	2	4
	計	13	2	33
女性用(7)	和式	1	2	3
	洋式	2	2	4
	計	3	4	7

（単位：個）

3．考察

今回の工学部 1 号館昼間・夜間バリアフリー調査結果から分かるように、バリアフリーに対する対策が進んできてはいるが、まだまだ十分ではないことが分かった。これは国立大学であるために予算が少なく施設が作れないというのが、原因の一つだと考えられる。また、もう一つの原因として考えられるのは、工学部の施設の改修を担当している人の、バリアフリーに対する意識が低いからではと考えられる。しかし、それ以前に施設を利用する我々のバリアフリーに対する考え方が低いように思われる。いくらスロープを設置しても、スロープの前に車を止めたり、通路に荷物を置いて通行の妨げとなってしまうことが多くある。今回のバリアフリー調査では、昼間だけではなく夜間の調査も行ったが、普段昼間に利用する人には特に問題にはならない電気のスイッチや通路の荷物が、夜間になるとバリアになるということが改めて分かった。トイレに関しては、最近ではトイレのあり方について考え直されてきており[1)]、公共施設において少しずつ利用しやすくなってきている。

4．おわりに

長崎大学工学部 1 号館のバリアフリーに対する取り組みは、進んでいるとは言い難い。おそらく他の学科、他の大学でも同じことが言えるであろうと思われる。しかし、これから先の大学の将来を考えて、大学側のバリアフリーに対する取り組みを盛んにすると共に、我々、利用する側のバリアフリーに対する理解を深めていくことが肝要である。

参考文献

1）鈴木了司：トイレ学入門, 光雲社, pp.215-216, 1988.6.